

坂本一成の住宅作品『水無瀬の町家』にみる、都市居住のための「町家」形式の再発見 - 近世・近代における町家との比較を通して -

建築史系 中谷礼仁研究室 <千年村>研究ゼミ所属 学部4年 碓氷創平 (1X21A029)

【1-1】本論文の目次構成

【序論】	
第1章：本研究について	
【1-0】 はじめに	
【1-1】 目次	
【1-2】 研究の端緒：抑圧の中の表現	
【1-3】 研究の背景：1970年代の社会的枠組みへの疑念と変容	
【1-4】 既往研究の概要および傾向、さらに本研究の位置づけ	
【1-5】 研究の対象：坂本や1970年代当時の建築家にとっての町家形式	
【1-6】 坂本一成の紹介	
【1-7】 研究の目的	
【1-8】 研究の方法	
【1-9】 用語の定義	

【本論】	
第2章：坂本一成の設計した『水無瀬の町家』について	
【2-0】 はじめに	
【2-1】 『水無瀬の町家』の概要	
【2-2】 『水無瀬の町家』の特徴	
【2-3】 小結	

第3章：1970年代当時における、坂本の町家に対する認識からみる近世・近代町家の形式的特徴	
【3-0】 はじめに	
【3-1】 「町家」という形式の偏りの存在の指摘（町家に関する既往研究Ⅰ）	
【3-2】 1970年代当時の坂本が触れえた「町家」情報の分析	
【3-3】 小結	

第4章 近世・近代町家と、『水無瀬の町家』および現代の「町家」呼称住宅作品との比較分析	
【4-0】 はじめに	
【4-1】 近世町家と『水無瀬の町家』の比較考察	
【4-2】 雑誌に掲載された現代住居としての「町家（まちや、町屋含む）」作品の分析	
【4-3】 小結	

第5章：坂本一成先生へのインタビュー：具体設計に表出する坂本のイデオロギー批判	
【5-0】 はじめに	
【5-1】 インタビュー概要	
【5-2】 インタビューの質問項目	
【5-3】 インタビュー内容	
【5-4】 小結	

第6章：考察－「町家」の転用／形式性と観念性の統合	
【6-0】 はじめに	
【6-1】 1970年代と2000年代以降の「町家」の違い	
【6-2】 坂本による、形式性と観念性の統合	
【6-3】 「町家」の転用、高窓と名称	
【6-4】 小結	

【結論】	
第7章：本研究を通して	
【7-1】 結論	
【7-2】 おわりに：表現による形式の抑圧	
【7-3】 本論文で用いた参考文献	
【7-4】 本論文における図版の出典	

第1章：本研究について

【1-3】研究の背景：1970年代の社会的枠組みへの疑念と変容

1970年代には、近代合理主義に対する疑念が強まった。桂秀美は『1968年』の中で、ポストモダン≒1970年代の激動が『**小さな物語**』の**実践による『大きな物語』の解体**』であると述べている。その一方で、建築界におけるポストモダニズムは、『大きな物語』の解体と質を異にする。

建築界の動向としてジェンクスは、ポストモダニズムという言葉を「**建築を言語として受けとる建築家だけに限定**」すべきだとしている。建築界においては、世界潮流としての「**物語（＝形式）の解体**」を狭義に解釈した折衷主義に限定されていたのだ。既存の社会的な意味付けに疑義を呈して設計を行なった坂本一成は、世界潮流としての広範なポストモダンを遂行していたといえる。そこで、坂本の問題とした建築の形式について分析を行なうことで、抑圧の中の表現をその最前線から明らかにできると考えた。



図1. 坂本一成と2種類のポストモダン

【1-4】既往研究の概要および傾向、さらに本研究の位置づけ

【1-4-1】坂本一成についての言及における、坂本の意識の及ばない部分への言及
坂本一成は、東京工業大学の篠原一男研究室を卒業した後、1960年代後半から活躍した建築家である。主要人物関連図は下記の通りである。

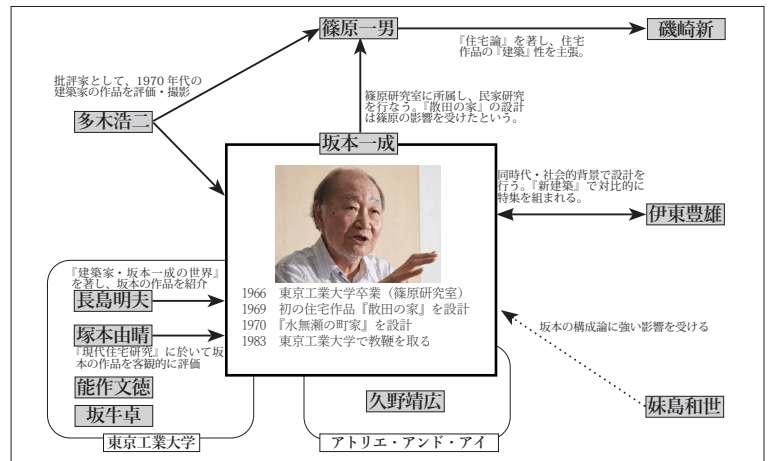


図2. 坂本一成の本研究に関わる人物関連図

坂本に関する既往研究（作家論）は坂本の言説の裏付けにとどまっており、坂本の設計姿勢および、坂本を評価した周囲の人々の思考は「従来の形式の批判」という1970年代特有の世界的、建築的な潮流の影響（世界潮流ポストモダン）を大きく受けている。意識的に形式にはたらしなかった坂本だからこそ、彼の無意識の内に彼を抑圧した形式の存在は重大である。

【1-4-2】町家研究の立ち遅れに起因する町家認識の偏在

御船の著わした『民家研究』では、「町家研究が民族史研究のなかでは比較的立ち遅れた」ことを指摘している。1970年代当時、町家研究は先駆としての奈良県の一部にとどまる小規模な研究体制であった。この偏在は、後の町家研究にも影響を与えていると考えられる。
また、都市や架構体という観点から町家が論じられるようになるのは2000年頃からである。1970年代当時の町家研究はその形態分析にとどまり、「町家」ではなく「民家」と呼ばれていた。すなわち、1970年代とは、「町家」概念発生の契機でもある。さらに、坂本が『水無瀬の町家』を設計するタイミングと同時期である。

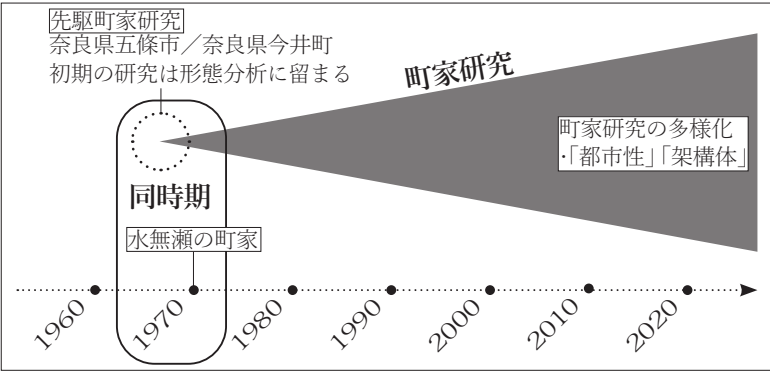


図3. 町家研究と『水無瀬の町家』の関係

【1-5】研究の対象：坂本や1970年代当時の建築家にとっての町家形式

本研究の分析対象は「坂本や1970年代当時の建築家に認識された町家形式」であり、具体的な分析対象として①坂本設計の『水無瀬の町家』の設計図面、②近世町家の設計図面および調査報告書、③現代における「マチヤ（以下、「マチヤ」は「まちや」、「町家」、「町屋」の総称を指す）」呼称を持つ住宅作品雑誌掲載情報、④坂本のインタビューでの発言を挙げ、分析する。

【1-7】研究の目的

坂本にとって「気にならない形式」すなわち、坂本が意識化および相対化しえなかった「潜在意識」が「町家」の形式に現れているという仮説を立てる。本研究の最終目的である「坂本が再定義した「町家」が民家町家に対して持つ意義と、「町家」形式の設計への表れ方の解明」によってその仮説を確認する。そのための具体的なステップとして、以下の目的を達成する。

- ①『水無瀬の町家』と近世・近代町家形式類似点・相違点の解明（形式的観点）
- ②1970年代に坂本を含む建築家や研究者たちが抱く「町家」イメージの解明（認識的観点）

【1-8】研究の方法

研究の方法は下図の通りである。第2章～第4章を用いて、
①『水無瀬の町家』の図面および写真から近世町家との形式的類似の指摘（形式的観点）
を行う。さらに「マチヤ」に対する建築家の認識を明らかにするために、
②「まちや（町家、町屋）」呼称を持つ現代住宅作品を雑誌から抽出し、掲載時の建築家の文章から命名の経緯を分析（認識的観点）
近世町家との形式比較（形式的観点）

を行い、第5章のインタビュー内容（認識的観点）を追加し、これらを踏まえて第6章にて考察を行う。

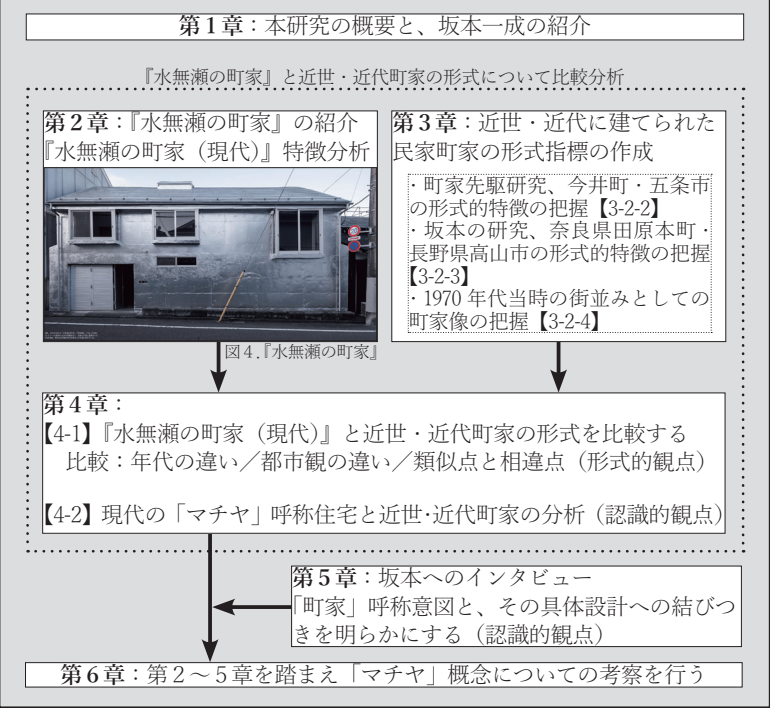


図5. 研究手法の概要

第2章：坂本一成の設計した『水無瀬の町家』について

第4章での比較に向けて、『水無瀬の町家』の特徴を整理する。

【2-1】『水無瀬の町家』の概要

『水無瀬の町家』は1970年に竣工した、東京都西八王子市に位置する坂本の設計した2つ目の住宅作品である。2007年の別棟増築および2024年の改修を経ているものの、道路に面するファサードに大きな変化はなく、屋根ギリギリまで引き上げられたガラスの出窓が3つ並ぶ、RC打放の壁面に対して、銀色のペンキが塗られた切妻平入屋根の特徴的な外観を持つ。

【2-2】『水無瀬の町家』の特徴整理

『水無瀬の町家』の特徴は下記の9つである。下図はその内の1つである。「①「主室」と呼ばれる細長い吹抜けの廊下および居間」を示している。同住宅の全ての諸室は1つ以上の開口部によって主室（廊下・居間）と接続されている。また、開口部を閉鎖することによって、主室のみが住宅内部で独立する。

- ①「主室」と呼ばれる細長い吹抜けの廊下および居間
- ②住宅内部開口部の閉鎖による「主室」の独立
- ③1階と2階のプロポーション
- ④銀色の鉄筋階段
- ⑤天窓と高窓による採光
- ⑥RC造に対するペンキによる着色
- ⑦平入の屋根部
- ⑧3つ並んだ出窓とファサード
- ⑨道路に斜めに構えた壁体

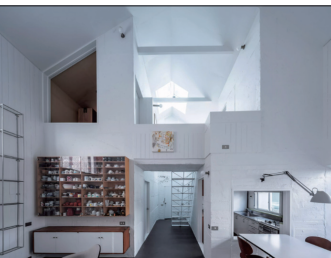


図6. 『水無瀬の町家』主室

図7. 『水無瀬の町家』主室と諸室の関係

第3章：1970年代当時における、坂本の町家に対する認識からみる近世・近代町家の形式的特徴
町家の形式の作成に際して、膨大な既往研究より参照資料を選択する必要がある。本研究に足る選択として、「1970年代の建築家や研究者が認識していたであろう「町家」情報＝坂本が東京工業大学篠原研究室で研究を行った（または『水無瀬の町家』を設計した）当時に触れえた「町家」の情報を用いて、
①近世・近代町家の形式
②1970年代と2024年現在の近世・近代町家に対する認識のずれ
の2つの観点から「近世・近代町家の形式指標（形式的特徴）」を定める。限定的な町家に関する情報から作成した「偏った形式指標」と、その偏り（ずれ）の説明項目を組み合わせることで、本研究に足る客観的な指標とする。

【3-2】1970年代の建築家や研究者が認識していたであろう「町家」情報

- ・町家先駆研究、今井町・五条市の形式的特徴の把握【3-2-2】
- ・坂本の研究、奈良県田原本町・長野県高山市の形式的特徴の把握【3-2-3】
- ・1970年代当時の街並みとしての町家像の把握【3-2-4】

【3.3】本研究で用いる「近世・近代町家の形式指標」

◇近世・近代町家の形式指標（⑭～⑰）◇分析にあたっての注意点（1970年代は近代町家の特徴として近世町家からと2024年現在の近世・近代町家に対する認識のずれ）
①近世初期～昭和期という幅広い建設時期
②敷地平面の縦横寸法（縦横比、規模）と近代期におけるその変化
③トオリニワ（シモミセ）に沿う居室の配置、間取り
④切妻で瓦葺の屋根
⑤農家と類似する小屋組み
⑥下屋を用いた1階の空間
⑦時代変遷に伴うツシ2階の居住化
⑧2階の空間と架構や2階開口部との関係性
⑨その他の意匠的特徴（出格子窓、煙出し、箱階段、2階窓の意匠変化など）
⑩平入で統一された軒
⑪土間の光庭の側面
⑫「入口どうじ」と呼ばれる狭い入口部分と、対照的で広い土間をもつこと
⑬開放感のある間仕切りから一室空間のような印象を受けること
⑭敷地形状の変化（近代町家）
⑮下屋の消失およびファサードの凹凸の減少（近代町家）
⑯2階の居室化の進行（近代町家）
⑰廊下の普及（近代町家）
①町家を民家の1事例とみつつ、従来の民家分析の手法では分析不可能であったこと
②敷地平面の縦横寸法（縦横比、規模）への言及がないこと
③土間の光庭の側面への言及がないこと
④平入で統一された軒への言及がないこと
⑤庭を介す農家と直接土間に入る町家の対比
⑥民家型から集落構造を類推していたこと
⑦「入口どうじ」や、対照的に広い土間をもつことへの言及がないこと
⑧吹抜けを持つ土間の、一室空間のような印象について言及がないこと
⑨敷地形状への無関心
⑩近代町家と近世町家の区別があること
※ただし1966年に奈良県で初の町家調査が行われたことから、はじめて「町家」という研究対象に直面した建築家や研究者が抱いた「町家」像は2024年現在において町家研究が充実した上で形成される「町家」像とは異なる。両者のずれを今一度整理するための項目として、「分析にあたっての注意点」を設けている。

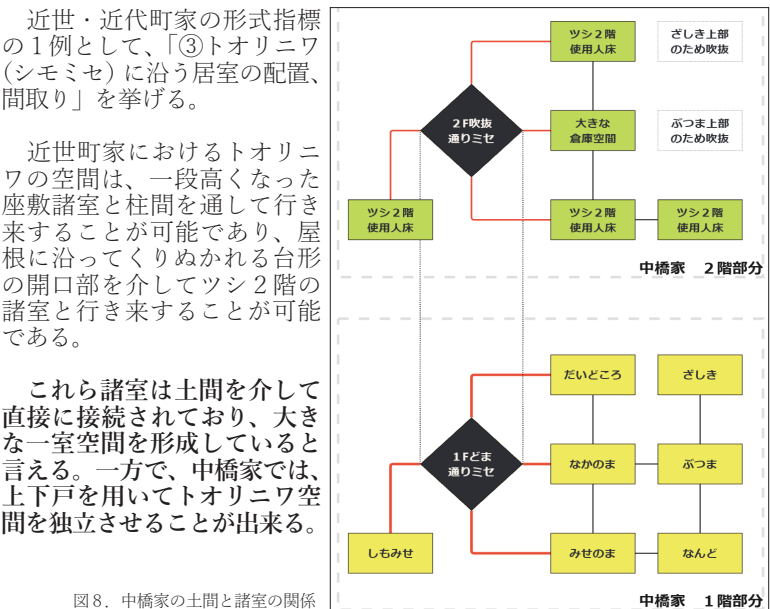
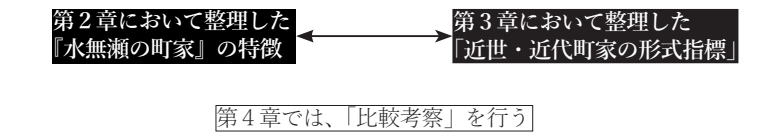


図8. 中橋家の土間と諸室の関係

第4章【4-1】近世町家と『水無瀬の町家』の比較考察

『水無瀬の町家』は、GLからわずか0.1mの高さに位置し黒色の床面をもつ細長い主室空間を持つ（「主室」と呼ばれる細長い吹抜けの廊下および居間）。『水無瀬の町家』および近世・近代町家。両者の特徴を踏まえた上で筆者は、この主室空間が近世町家におけるトオリニワ空間のように動線と生活の主軸となる吹抜空間であったと考える。
第4章ではこのように、『水無瀬の町家』と近世町家の形式的類似を指摘する。



『水無瀬の町家』と近世・近代町家の類似点と相違点を下記に示す。また、比較に際して用いた各特徴の凡例として、『水無瀬の町家』の特徴を「(水)」、近世・近代町家の形式指標を「(近・形)」、形式指標の注意点を「(近・注)」、近世町家の参考特徴を「(参)」のように、特徴の左端に表記する。

【4-1-1】『水無瀬の町家』と近世町家の類似点

①一室空間として開放可能な「主室」空間（トオリニワ空間）
(水) ①「主室」と呼ばれる細長い吹き抜けの廊下および居間
(近・形) ③トオリニワ（シモミセ）に沿う居室の配置、間取り
(近・形) ⑪土間の光庭の側面
(近・形) ⑬開放感のある間仕切りから一室空間のような印象を受けること

②住宅内部開口部の閉鎖による「主室」の独立
(近・形) ⑬開放感のある間仕切りから一室空間のような印象を受けること
(水) ②住宅内部開口部の閉鎖による「主室」の独立
(近・形) ⑫「入口どうじ」と呼ばれる狭い入口部分と、対照的に広い土間をもつこと

③「ツシ2階」の開口部とスケール
(水) ③1階と2階のプロポーション
(水) ⑥銀色の階段
(近・形) ⑦時代変遷に伴うツシ2階の居住化
(近・形) ⑧2階の空間と架構や2階開口部との関係性
(近・形) ⑯2階の居室化の進行（近代町家）

④2階前面の横長出窓
(水) ⑧3つ並んだ出窓とファサード
(近・形) ⑨その他の意匠的特徴（出格子窓、他項は割愛）

⑤天窓や高窓といった採光・換気装置
(水) ⑦天窓や高窓の採光
(近・形) ⑨その他の意匠的特徴（煙出し、他の項目は割愛）

⑥屋根や下屋（庇）
(水) ⑤平入の屋根
(水) ⑨道路に対して斜めに構えた壁体
(近・形) ⑩平入で統一された軒
(近・形) ⑮下屋の消失およびファサードの凹凸の減少（近代町家）

⑦斜めに構えたアクセントとしての壁体
(水) ⑨道路に対して斜めに構えた壁体
(参) 愛知県の旧東松家住宅の土間空間

【4-1-2】『水無瀬の町家』と近世町家の相違点

①敷地形状（間口と奥行の大小の違い）②構造形式（木造かRC造かの違い）
(近・形) ②敷地平面の縦横寸法（縦横比、(水) ④RC造の躯体とベンキによる着色規模）と近代期におけるその変化
(近・注) ⑨敷地形状への無関心
(近・形) ⑬敷地形状の変化（近代町家）
③1階部分の下屋（庇）について
(近・形) ⑥下屋を用いた1階の空間
(近・形) ⑮下屋の消失およびファサードの凹凸の減少（近代町家）

『水無瀬の町家』と近世・近代町家の形式の類似点の事例紹介

【4-1-1】で示す類似点の例を幾つか紹介する。表頁の図7、図8、を参照。

①一室空間として開放可能な「主室」空間（トオリニワ空間）
②住宅内部開口部の閉鎖による「主室」の独立
近世・近代町家における吹抜の土間空間では、その他の諸室と直接結びつくことで、開口部の開放による一室空間および、閉鎖による独立が可能となる。

『水無瀬の町家』で主室と呼ばれる廊下・居間を接続した空間も、その他全ての諸室と1つ以上の開口部で結びつき、開口部の開放による一室空間および閉鎖による独立が可能である。

⑤天窓や高窓といった採光・換気装置
各諸室は主室空間の天窓を介して間接採光を行う。

右図は『水無瀬の町家』の2階寝室2の室に細長くあけられた天窓による間接採光を示している。土間を介した採光は近世・近代町家にも多く見られる。

近世・近代町家では「煙出し」のためのハイスайд（トップ）ライトが設けられている。

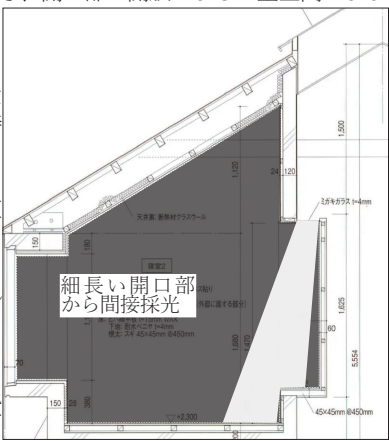


図9. 主室を介した間接採光

上記に示す特徴の比較考察より、相違点や現代と近世・近代の時代的变化を経て採光の難儀なところが一部見受けられるものの、空間構成や開口部、さらに採光や換気といった多角的な観点から『水無瀬の町家』の持つ近世・近代町家の形式を確かめることができた。これらをもって両者の類似性の指摘とする。

一方で、1970年代当時は町家の形式として認識されたかどうかが定かではない種々の近世・近代町家の形式が『水無瀬の町家』では表れていると言える。このことは、坂本が研究を通して、民家や町家の形式を無意識の内に感じ取り、坂本の設計に影響を与えていたことが伺える。

【4-2】雑誌に掲載された現代住居としての「町家（まちや、町屋含む）」作品の分析

「町家(まちや、町屋含む)」と名付けられた作品は、①旧来町家をリノベーションしたもの、②建築家が意図的に「町家」呼称を用いた都市住居、と大別される。雑誌に掲載された「町家」作品の呼称設定意図の分析を通して、いかなるイメージが託されているかを探り、認識的観点から「マチヤ」呼称を分析する。

第3章において設定した1970年代当時の近世・近代町家の形式指標および注意事項について約100項目の建築作品に対して適切な分析が可能であるように修正・合理化し、下記の2種類のチェックリストとする。

①定量分析項目【結果は4-2-4に記述】：
作品掲載時の図面やパースを用いて一問一答型で回答可能な町家の形式項目（形式的観点）
②定性分析項目【結果は4-2-5に記述】：
作品掲載時の意匠設計者本人の文章から分析可能な「町家」の認識に関する項目（認識的観点）

【4-2-4】「定量分析項目」の分析・結果整理

定量分析項目の分析を通じて、1970～2000年にかけて設計された作品群と、2000年以降に設計された作品群に相違がみられることを指摘できる。共に「マチヤ」という呼称を用いているにもかかわらず、2000年を境にして2種類の異なった作品群が見られることは注目に値する。詳細は下記に抜粋して示す。

「マチヤ」呼称作品は、2000年の前後で2つ山をもっており、作品発表年のピークは一つ目の山の1995年である。

右図は構造形式を示している。RC造や混構造が多く見られる1つ目の山に対し、2つ目の山では木造が多く見られる。

また、右図は階数を表す。1995年には3階建ての「マチヤ」作品が増し、2000年以後ではほぼすべてが2階建てとなっていることが読み取れる。

最後に下図は、間口／奥行比率を示し、2000年以前では1.0付近の正方形敷地が多く、2000年以後は長方形敷地となることが分かる。

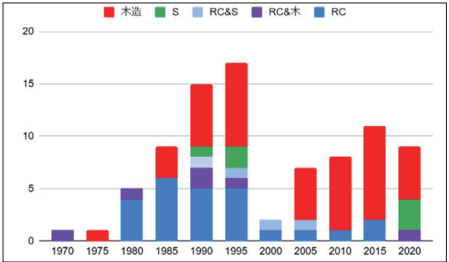


図10. 「マチヤ」作品の構造形式

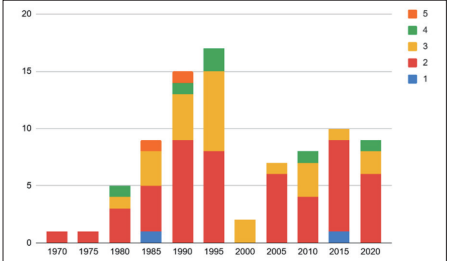


図11. 「マチヤ」作品の階数

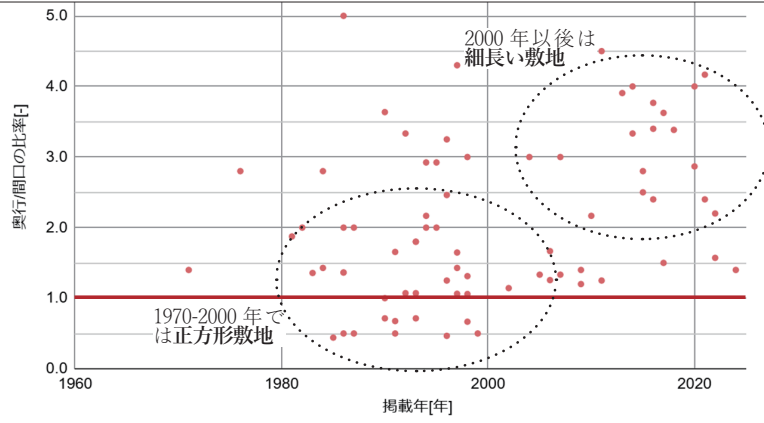


図12. 「マチヤ」作品の間口／奥行比

【4-2-5】「定性分析項目」の分析・結果整理

定性分析項目の分析を通じて、「マチヤ」の呼称はおおまかに、①都市住居として都市の中に位置づけられる住宅を考えるためのキーワードである一方で、②敷地形状や接道など敷地条件から他律的に決定される諸条件をあらわすキーワードでもあることがわかる。前者について、下記に示す。

・＜都市＞に住まうための住まいとしての諸条件こそが、この住宅の建築としての成り立ちを決定づけている。（染谷正弘, 1986）
・建物の1階を通り連続として利用でき誰かのものというよりはまちのものと言える形式である「町家」を提案した。（玉井洋一, 2022）

「まち」の建物が建ち並ぶ状態の中に埋没する住宅の像を、想定すること（染谷正弘, 1981）
・都市の生気に触れるような建物がふさわしいと思った。・「街に暮らす」意識を育み、手法を考えなければと感じたが都市的なファサードを描く建築ではなく、むしろファサードをもたぬ、原型的な空間の集合を内包する形を探した。（入江経一, 1984）
・都市住居としての基本性能を実現するための機能的必然の結果が＜町家＞だ（染谷正弘, 1992）
・街なかに建つ都市住居の定型（染谷正弘, 1993）
＜家と家の間をデザインする＞ことによってはじめて住宅は「都市」的になるということであった。街なかに築かれたそれら小住宅を素直に「町家」と呼んでいる。（染谷正弘, 1998）
・都心の住宅地で誰もが平等に共有する街路と空の内、通る庭に代わる空間は上空からの光を運んで住まいの奥へ導く吹抜けとして家の中心を貫いている（安藤和浩, 2007）
※ただし、括弧内の名前は雑誌掲載時文章を投稿した建築家であり、年号は雑誌掲載年を示す。

第5章：坂本一成先生へのインタビュー：具体設計に表出する坂本のイデオロギー批判

＜建築家のもつ形式性への疑念「クリティカル・フォルマリズム」＞

坂本の民家集落への興味は、町や都市によって形作られる集落構成に対するものであった。坂本にとって、「パラッツォ（都市住居）」に対比される住居形態として、自然の広い敷地の中で自由に形式性を追求できる「ヴィラ」の存在があげられる。ヴィラとは形式主義（フォルマリズム）の住居であり、坂本が用いた「町家」の呼称はヴィラの批判（クリティカル・フォルマリズム）であった。

＜「イデオロギー嫌い」である坂本＞

消費社会が否応なしに作り出してしまう材料や外形に対する固定観念も、坂本による批判の対象であると述べる。坂本の設計姿勢はイデオロギーの拮抗と批判の内にあり、自身を「イデオロギー嫌いである」と称する坂本は最終的に、イデオロギーの失われた地点、つまり即物的な部材の関係性のみが存在する状態に行きつく。

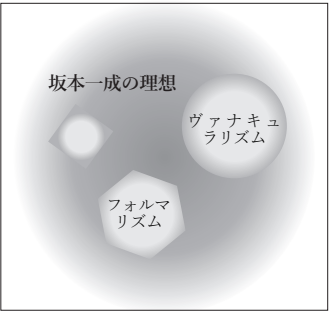


図13. 「イデオロギー嫌い」である坂本

坂本在具体設計における思想のあらわれ
主室の高窓は、上記の批判精神の具体例である。高窓の上端は屋根から約150mm少しのところまで引き上げられ、桁材を避けて開口部を配置することの方が合理的であり慣習的であるという通俗性、に対する批判（クリティカル・ヴァナキュラリズム）である。一方で高窓の下端は、開口部によって内部を覗くことの出来てしまったら住宅として成立しないという、過度な形式性への批判（クリティカル・フォルマリズム）と読み替えることができる。

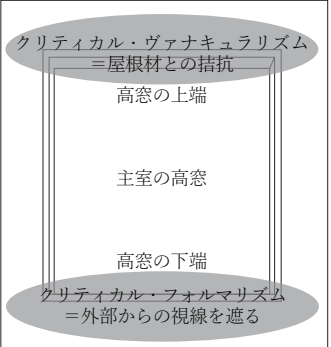


図14. 高窓に具体的に反映される坂本の姿勢

第6章：考察—「町家」の転用／形式性と観念性の統合

【6-3】「町家」の転用、象徴的な例としての「高窓」

坂本は、具体的な形式であるコンテクスチャリズムを積極的に読み替え、「町家」という衝撃的なキャッチコピーを与えることによって、町の中の家であるという都市住宅の条件として認識させた。それは1970年代の建築家・研究者の研究対象である具体形式としての「町家」と、当時の建築家の課題「都市居住」という抽象観念としての「町家」の分離の解決である。むしろ、歴史に埋没した「町家」概念の再発見であり、具体形式の抽象観念への転用であるとも言える。

第7章：本研究を通して

【7-1】結論

1970年代当時において「町家」研究はその発端であった。研究対象として、また都市居住のための手段として組上に乗った「町家」という言葉は、建築家である坂本による新規的な作品＝『水無瀬の町家』の発表を通して、1970年代当時の住宅が抱える課題の解決策として広報された。

2024年現在私たちが「町家」と呼び、近世・近代に見る一定の形式を装備する概念は、1960年代より形成が進行したものであり、その概念発生の契機に坂本一成は一定の役割を果たしたと言える。

坂本によって再発見された「町家」という概念は、住宅設計として実際の都市の内に設計を行う具体性も具備したことによって社会的に定着したといえる。

【7-3】本論文で用いた参考文献の主な例

◇坂本一成
『ギャラリー・間 企画・編』、坂本一成 住宅・日常の詩学』、TOTO出版、2001。
服部一見、『妹島和世論 マキシマル・アーキテクチャー』、NTT Shuppan、2017。
坂本由晴、西沢大良『現代住宅研究』、INAX出版、2004。
坂本一成、『坂本一成 住宅めぐり』、フリックススタジオ、2013。
伊東豊雄、『風の変様体：建築クロニクル』、青土社、1999。
坂本一成、長島明夫、『建築家・坂本一成の世界』、LIXIL出版、2016。
大場修、『近世近代 町家建築史論』、中央公論美術出版、2004。
土本俊和、『中近世都市形態史論』、中央公論美術出版、2003。
御船達雄、『民家研究』、建築史学、2006。
大河直躬、『現在の民家研究の方向』、建築雑誌、1996。
◇ポストモダンと形式性
中谷礼仁、『国学・明治・建築家』、1993、渡波社。
多木浩二、『生きた家』、2012、青土社。
中谷礼仁、『セヴェラルネス+』、2011、鹿島出版会。
磯崎新、『建築の解体：一九六八年の建築情況』、鹿島出版会、1997。
チャールズ・ジェンクス、『+u 建築と都市 1978年10月臨時増刊 ポスト・モダニズムの建築言語』、株式会社エアーランド、1978。
◇町家
学研、『日本の民家（第6巻）』、1980。
西山卯三、『すまい考今学 現代日本住宅史』、彰国社、1989。
野口徹、『日本近世の都市と建築』、法政大学出版局、1992。
上田鶴、土屋敦夫編、『町家 共同研究』、鹿島出版会、1975。
◇雑誌分析で用いた雑誌
新建築社出版の『新建築』誌と『住宅特集』誌／建
築思潮研究所（建築資料研究社）出版『住宅建築』誌。

◇本レジュメの図版出典

図1-3、図5、図7、8、図10-15は筆者作成。
内、図2における坂本の肖像は、『アーキテクト・マガジン』、「アトリエ・アンド・アイ 坂本一成研究室 坂本一成」、2016/12/19、https://www.arc-agency.jp/magazine/2644/2、閲覧日：2024/11/9より引用／図15における高木家住宅および『水無瀬の町家』図は『学研 日本の民家6』および『新建築』、新建築社、2024-04より引用。
図4、6は『新建築』、新建築社、2024-04より引用。
図9は『新建築』、新建築社、2008-07より引用した『水無瀬の町家』断面図に、筆者加筆。
図16は『新建築』、新建築社、1982-06。図17は『住宅特集』、新建築社、1986-02より引用。

その象徴的な表出を『水無瀬の町家』主室の高窓に見ることができる。近世町家の高窓は「採光と換気」を主目的とする「トオリニワのかまど直上、妻側壁面」に位置する。一方で『水無瀬の町家』の主室の高窓は、ファサード面の他2つの窓と並び、都市に対して大きく開かれている。近世町家において側面に配置された「高窓」が現代においてファサード面に転置されているということだ。このことは、諸条件に対応するための具体形式である「高窓」が、「都市居住」という抽象観念のための「高窓」として「転用」されたといえないだろうか。

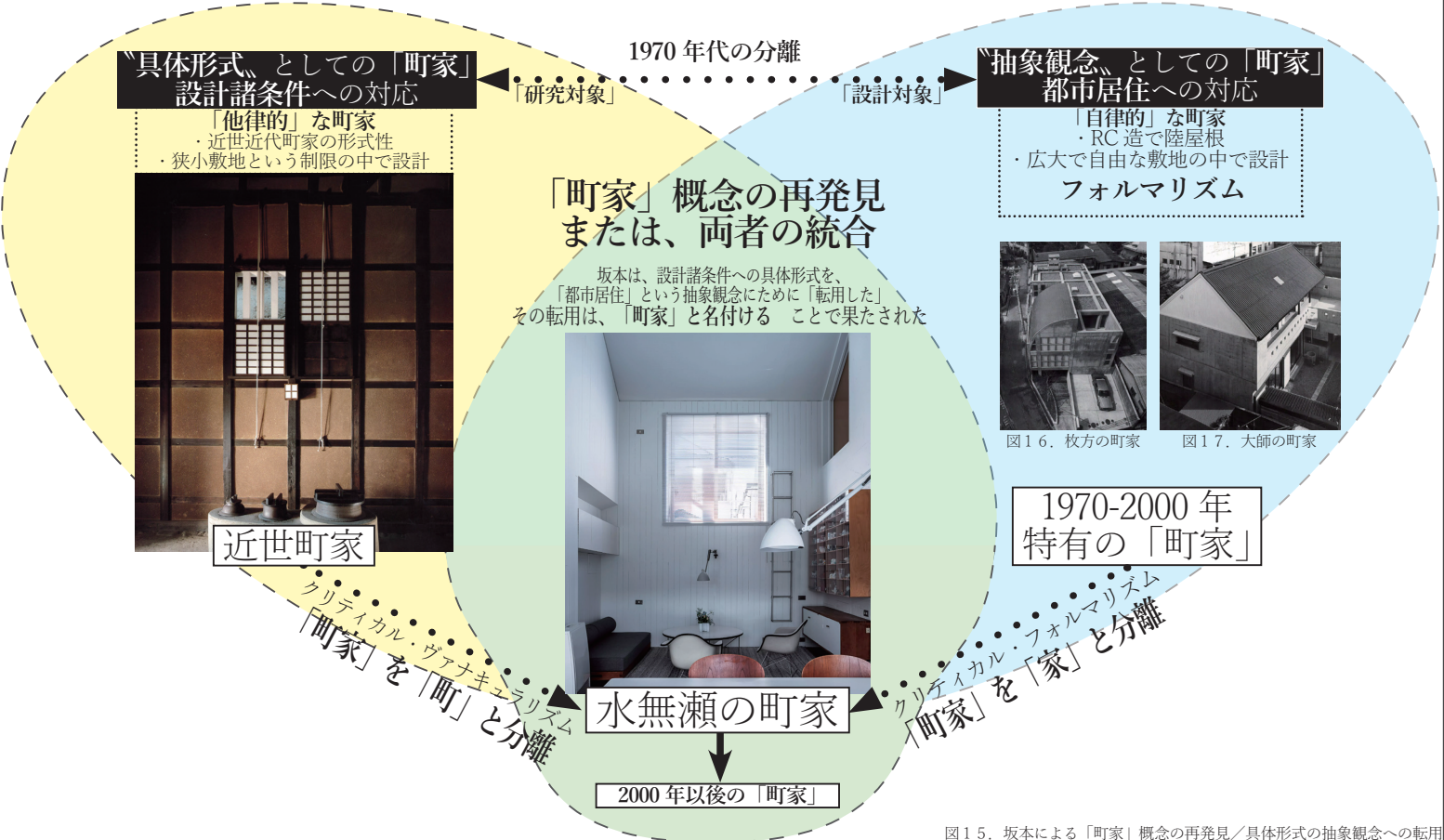


図16. 枚方の町家

図17. 大師の町家

1970-2000年
特有の「町家」

図15. 坂本による「町家」概念の再発見／具体形式の抽象観念への転用